

お正月の晴れ着に想いを馳せて

父が呉服卸の仕事をしていたお陰ですが、子どもの頃は初詣に着物を着せてもらっていました。それでも若い頃は、和装は決まり事が多すぎて面倒臭いと思っていました。着物を選ぶのにも好きな色や柄を自由に選ばません。その色はもっと歳を重ねてから、その柄はお商売をしている人向けとか、更には着物自体に柄の量や位置、紋のある無し、袖の長さ等で格式があって TPO を踏まえなければいけません。喜んで着せてもらっていた着物が段々と煩わしくなって、成人式ではこれという物に出会うまで随分親を悩ませた記憶があります。

最近の成人式で様々な色や柄の振り袖を自由に着こなしている若い人たちを見るにつけ、時代が変わったことを実感し羨ましく思います。とはいえ初詣に着物を着る人も珍しくなって、成人式や卒業式・謝恩会では振り袖よりも袴姿の人たちが増え、そもそも和装でない人も多くなってきました。

一方、急成長してきたのが特別な晴れ着以外のレンタル着物で、京都に旅行に来た人達が気軽に着付けてもらって街歩きをする姿を多く見掛けるようになりました。きちんとした業者さんもいるのですが、秋になっても浴衣のような着物や、着物と帯があっていないとか、着付けが酷いとかいうことについて目が留まってしまう。着物を着て喜んでいる海外の旅行者に漬け込むような業者さんに対しては残念な気持ちになります。

先日遭遇したのは、男性は濃い色合いの大島紬に女性は黒留袖で信号待ちをしているビニール傘のカップル。二人の着物のバランスが取れていないし、黒留袖を着付けてもらったら雨の中をふらふら街歩きをしないで欲しい

いなど、苦々しく思う自分に「昭和の人」を自覚しました。でも、このような風景が日常になると、着物文化そのものが先細りして取り返しのつかない事になってしまうかもしれません。あんなに面倒臭いと思っていたときたりこそが、着物と切り離せない文化だったと気付いたのです。

事務所のある西陣辺りでは、今でも子どもの入学式にきちんとした着物姿で出席するお母さんたちを見掛けます。和装を生業とする会社も多く、築 100 年を超える京町家がまだまだ残るこの地域ならではのようですが、着物にまつわる季節感や格式を丁寧に素晴らしい文化として継承してもらいたいものです。

成宮範子



ご近所の方が、結婚の記念撮影をもえぎの玄関で撮られた時の風景。本当に素敵でした。「花嫁は母系に伝わる女紋の入った引き振袖。丸帯。地毛結いの文金高島田に角隠し。花婿は黒紋付羽織袴」とお聞きしています。